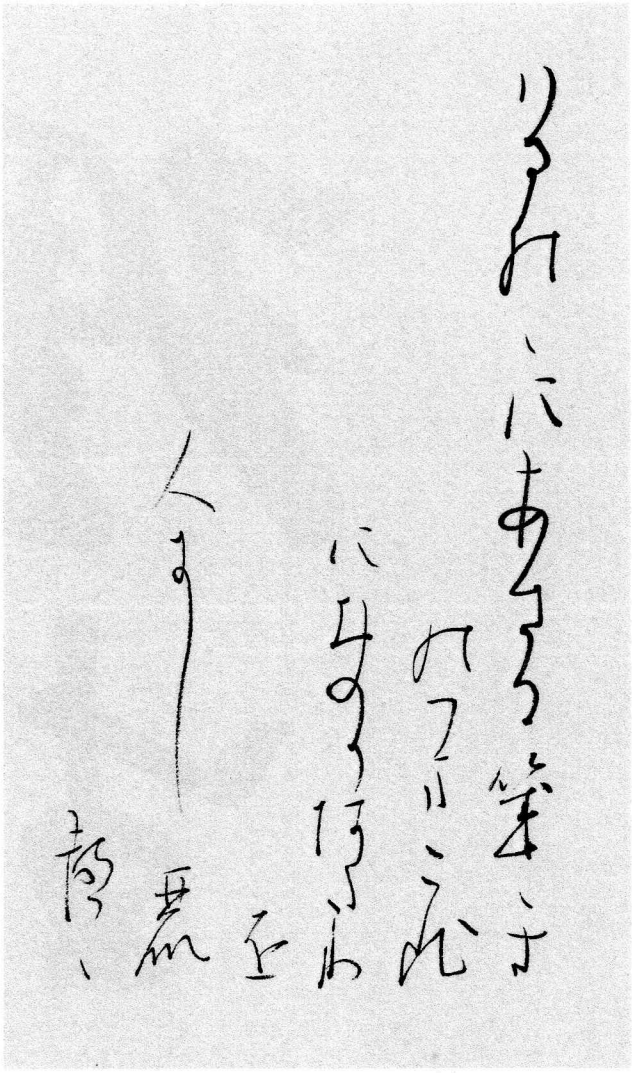
中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力（三）
―三十六歌仙―

春の野にあさるきぎすの　妻恋に　己があたりを人に知れつつ

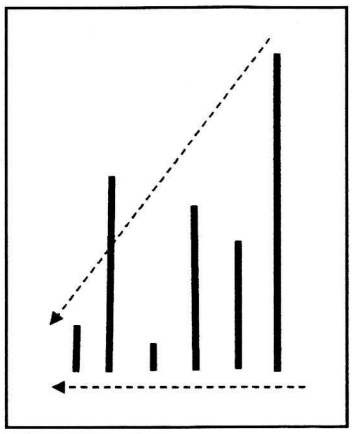
大伴家持

（大伴家持）
七一七（養老元）？七八五（延暦四）年。大伴旅人の子。『万葉集』の編者を家持とする説があります。『万葉集』二〇巻　約四五〇〇首。現存最古の和歌集で、奈良時代初期（八世紀初頭）から歌が集められ、大伴家持が手を加え、『万葉集』という一大歌集が成立したのであろうと推定されています。



中村素堂先生の書　中谷春径先生所蔵

〈線的構成〉



〈字母〉

ハる能ゝにあさる幾ゝす
能つ万こ悲
におの可阿多利
を
人尓し　麗
都ゝ

〈歌意〉
春の野で餌をあさっているキジが、妻を慕って、自分のありかを人に知られながらないていること。この歌は「万葉集・巻八　春の雑歌一四四六番」に出ています。

素堂先生の仮名の稽古は万葉集が必須でした。今回の書式は、前回の「下り藤」の逆で下を揃えた『木立ち』と称される形式で書かれています。対角線の下半分に書き、はじめの1行を上から下まで一杯に使っています。（中村青藍）